



発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当） 〒357-0021 飯能市大字双柳94-25 Tel (042)973-2111

## 世界遺産ならぬ、「飯能遺産」を見つけてみよう

### ●「飯能地域遺産事典」のできあがり～

「はんのうお宝スポット」。タイトルだけ見ると何が書いてあるのかよく分からないですね。この小冊子は、飯能市にある歴史や自然といった地域の遺産に関する様々な情報、つまり「世界遺産」ならぬ「飯能遺産」をわかりやすくご紹介するために創刊するものです。これから定期的に発行されるこの冊子を綴じていただくと、飯能のことなら何でもわかる「飯能地域遺産事典」のできあがりです。

### ●「文化財時報」は？

これまで市から発信されるこういった情報は、「文化財時報」を通して提供されてきました。でも

この雑誌、実は48年ももの長い間継続して発行されている、まさに「遺産」というべきものなのです。これはこれでその伝統を大切に、文化財保護行政の活動報告書としての役割をより強くもたせ、文化財を所有、あるいは管理している人たちを主な対象として発行を続けていくこととなります。

### ●創刊号の特集は「はんのうの宝もの」

タイトルが「はんのうお宝スポット」ですから、まず最初に何と言っても飯能市の「お宝」を紹介しなければなりません。そこで、創刊号では文化財保護審議委員会委員と文化財担当職員が、「これこそ飯能の宝物だ!」と思うものをご紹介します。

特集「はんのうの宝もの」……

## 飯能市は植物の宝庫

文化財保護審議委員会 委員  
手塚 映男

**1** **植物から見た飯能市の特色** 飯能市の市域は、入間川、高麗川、直竹川の三つの川をほぼ西の方向にさかのぼって奥深く広がり、秩父市や横瀬町との境の尾根に達しています。市内で最も低い岩沢の入間川の河原の標高が約70m、秩父市との境界にある有間山が1213.5m、大持山近くの境界あたりが約1240mで、その差はおおよそ1170mもあります。飯能市はかなり内陸部にありますが、日本の森林帯からみると月の平均気温などから考えて、山麓地域や三つの川に沿った低地は暖温帯で、山地に入るにしたがって冷温帯に変わっていると思います。したがって飯能市では、関東地方

中部の暖温帯と冷温帯の植物が生育しており、そのうえ、山や谷など地形の変化に富んでいるので、いろいろな植物を観察することができます。そのため、天覧山・多峯主山をはじめ、棒ノ嶺、伊豆ヶ岳、顔振峠などには、昔から多くの研究者や愛好家が植物の調査や観察に訪れています。

**2** **飯能市の自然林** 日本のように雨が多い土地では、自然のままにしておくと、高山など特別な環境の所を除き林ができます。暖温帯では、初めはアカマツなど日当たりを好む木の林ができますが、だんだんに変わって最後には日陰でも育つスダジイやアカガシなどカシ類の常緑広葉樹林ができ

ます。冷温帯ではブナやミズナラなどの落葉広葉樹林ができます。ここでは、まず、飯能市で観察できるこのような自然林の幾つかをあげてみましょう。

**天覧山のスタジイの林** 能仁寺の東側の登山道を登ると間もなく中段広場があります。そのすぐ上の登山道に沿って、幹の直径が50cm前後もあって、大きく枝を広げたスタジイの林があります。低い木の層には、ヤブツバキやヤブコウジなどシイ林を特徴づける種類もあります。ぜひ残しておきたい林です。なお、天覧山や多峯主山にあるマツ林や、コナラやイヌシテの多い林の大部分は、常緑広葉樹の林ができる途中の林だと思えます。これらの林も植物の種類が多いので機会をみて触れてみたいと思えます。

**浅間神社のウラジロガシの林** 上直竹の浅間神社の奥社へ登る広い尾根(標高約250m)に、ウラジロガシやツクバネガシとモミの木もいっしょになった林があります。低い木の層にはウラジロガシの幼樹やヤブツバキなどが生えていて暖温帯の上部の自然林の特徴をよく表しています。モミは、暖温帯から冷温帯にまたがって生えている木で、山地に入ると山の尾根などによく見かけます。秩父市への道を正丸峠の方に向かうとき、山の尾根にほかの木よりも高く生えているのが見られます。

**大山祇神社のウラジロガシの林** 正丸トンネルの手前の畑井から南に入った南川の標高380mほどの所に大山祇神社があります。神社の裏側の東向き急斜面にウラジロガシとツクバネガシが混じった林があります。ウラジロガシは、胸の高さの幹の直径が1m以上もある大木で驚きます。近くの子ノ権現(標高約640m)の西方にブナの林もあるので、暖温帯の常緑広葉樹林できるのも、この辺りが限界に近いと考えられ、その意味からも貴重で埼玉県の天然記念物になっています。なお、これらの林は陽の当たりやすい東または南向きの

斜面にあることも興味を持たれます。

**ミスナラやイヌブナの林** 顔振峠(標高508m)のあたりから奥武蔵グリーンラインを飯能市で一番北の端にある刈場坂峠(東側のツツジ山の標高879m)に向かう道路際の林は興味深い所です。飯盛峠(標高780m)近くの尾根筋に、木を伐採したあとに自然にできたと思われるミスナラやヤマサクラの林があります。また、ぶな峠(標高782m)あたりから刈場坂峠にかけて、イヌブナ、ミスナラ、カシワなど冷温帯を特徴づける植物を点々と見ることができ、人手を加えないでよく冷温帯の林ができる所であることが実感出来ます。さらに、秩父市との境界に近い大持山から名栗の伝説で知られたウノタワ(標高1080m)あたりにかけて、ブナ、ミスナラ、カエデ類などの大木が林を作っていることが、平成16年に飯能市郷土館など5つの博物館などで行った企画展『入間川再発見!』で紹介されていましたが、標高が高い所では、冷温帯の特徴的な植物や林を多く見ることができると思えます。

ここでは自然林を中心に書きましたが、飯能市は貴重な自然林だけでなく、緑が多く景観も優れているので、ほぼ全域が埼玉県立奥武蔵自然公園になっています。この豊かな自然を飯能の宝として、これからも大切にしなければならぬと思えます。



天覧山のスタジイの林

# 燃えない工夫がいっぱい「絹甚」

きぬじん

飯能市教育委員会生涯学習課  
熊澤 孝之



左下の写真を見てください。これは「絹甚」の店蔵の正面です。今から約100年前に建てられました。絹甚は建てられた当時のままの姿で、今も右の地図の所(本町2-2)に建っています。

日本の家は、今も昔も木で作られています。その為、火事は非常に恐ろしいものでした。特に昔は消防自動車もありませんでしたので、火事を消すことは大変でした。しかも近隣の川越では、明治26年に大火があり、街のほとんどが燃えてしまいました。ところが、この大火でも燃えなかった建物がありました。それが土蔵です。土蔵は屋根が瓦で壁は土でできています。窓には土でできた扉がついています。その為に火事でも燃えずに残ることができたのです。この経験を活かして、川越では大火以後、一斉に「店蔵」と呼ばれる建物が建てられるようになりました。店蔵とは、土蔵の火事に強い構造と、店としての機能を合わせ持った蔵造りの店のことをさします。

飯能でも明治30年代後半から店蔵が建てられるようになっていきました。その様ななかで建てられたのがこの「絹甚」です。

絹甚に見られる数々の火への備えを紹介します。

下の写真に墨で三番・四番と書かれた戸があります。これは「土戸」と呼ばれ、現在の防火シャッターと同じものです。書かれている番号は、土戸を閉める順番を示しています。土戸は縦長の板の上に土が

塗られ、火でも燃えないようになっていました。普段は床下などにしまっていますが、近くで火事が起こると、店の入り口にこの土戸をはめ、燃え移るのを防ぎました。

次に中央の写真ですが、一階(下屋)の屋根の上に、小さい壁が両側に建っているのがわかります。これは「うだつ」と呼ばれています。これがいわゆる「うだつが上がらない」のうだつで、「出世できない」の意味になりました。うだつは、隣の火事が2階の窓に燃え移るのを防ぐ防火壁の役割を持ち、このうだつが火を受け、くい止めました。現在の飯能市に残っている店蔵6棟の中で、うだつがあるのはこの絹甚だけです。うだつの瓦には、右から「きぬや」の文字が刻まれています。絹甚が明治時代に、絹を扱う商売(周辺の村から絹を買い付けて、江戸や京都などの商人に売っていた)をしていたため、瓦にこのような文字を入れたのでしょう。

右下の写真は1階、奥の出入口です。非常に厚い扉(観音扉)が付いています。火事の時だけこの戸を閉めました。また、扉の奥には土が塗ってある引き戸があります。二重の備えをしていたのです。その戸には建てた人の名前(篠原長三)と建てた年(明治37年)が書かれています。

このように、当時の人は様々な工夫を凝らして火事から大切な商店を守ろうとしていたのです。



土戸 下屋

絹甚の外観



うだつ



引き戸 観音扉 一階奥観音扉

## お墓の話 ～県指定史跡 中山信吉墓～

飯能市教育委員会生活学習課  
村上 蓮哉

お墓の話をしませう。誰のお墓かという江戸時代の初めに水戸藩(徳川御三家の一つ)の付家老として活躍し、水戸光圀(「黄門さま」)を二代目水戸藩主として推挙したことで知られる中山信吉という人のお墓(埼玉県指定史跡「中山信吉墓」)です。

まず、お墓の形を見てみましょう。お墓は高さ4mに盛り上げられた塚と、その上に立てられた高さ3mの巨大な宝篋印塔の二つに分けられます。

宝篋印塔には立てられた年の年号(寛永二十一年1644)が刻まれており、その年号は信吉が亡くなってから2年後です。おそらく信吉の三回忌に塔が立てられたと推測され、塚もそれに合わせて完成されたと考えられます。中山信吉墓以外の中山家当主の墓には宝篋印塔が使われていないことから、何故信吉の墓にだけ宝篋印塔が採用されたのかは謎と言えます。この謎を追求すると、墓石の流通の様子や流行についてなどを明らかに出来そうです。

次に、塚について考えてみましょう。塚を持つお墓が他にあるか調べてみますと、加賀金沢藩(石川県)の前田家のお墓が、塚を造りその前に墓標を立てていました。しかし、東京都内に数多く残されている大名のお墓に塚を持つものはなく、中山信吉墓はお墓として珍しい形であるといえます。

巨大な石塔を上に乗せられるほど、しっかりした高さ4mの塚を造るという行為は並大抵のものではありません。塚を造った理由は何でしょうか。

それを明らかにする鍵は、中山信吉木碑(埼玉県指定書跡)にあると考えられます。木碑は彫刻された亀の甲羅の上に乗っており、墓前に造られ明治の頃に取り壊された御影堂という霊廟の中にありました。碑面には江戸時代初期の知識人として著名な林羅山の文章が刻まれています。林羅山は朱子学という儒学一派を学んだ学者として知られ、儒学は目上の者を尊ぶことをその教えに含みますので、もしかすると二代目当主の中山信正は、林羅山にかなりの影響を受け、塚を造って信吉を手厚く墓に葬ったと考えられます。中山信吉墓は中山信正の人物と思想がはっきりと表れたものであると言えます。

また、もう一つ例を挙げると、信吉の父の家範、祖父の家勝のお墓は、家勝と家範の墓が自然石で、簡素・自然であることを重視する禅宗の教えを墓石に反映したと考えられます。また、兄の照守の墓も無縫塔という卵のようにつるりとした、元々禅宗の僧侶の墓塔として立てられていた石塔です。

つまり、この三人のお墓(市指定文化財中山勘解由三代の墓)は禅宗という宗派の思想が三代にわたってお墓に表れていると言え、同じ一族ではありますが、信吉の墓とは異なった考えに基づきお墓が造られています。

このように、お墓には調べると特定の個人や一族、社会の様子を知ることができるものがあり、それはさながらタイムカプセルのようだと言えます。



県指定史跡 中山信吉墓(智観寺)



市指定文化財 中山勘解由三代の墓(能仁寺)